

## 4 花き

### (1)キク（露地栽培）

#### ア 生育経過【作柄概況調査の結果より】

##### (ア) 8月咲き

挿し芽作業は3月中旬から3月下旬、苗の定植作業は概ね4月下旬、苗の摘心作業は定植の約7日から10日後に行われた。挿し穂時期が平年並から10日早かったことから、定植と摘心作業もやや早めの傾向であった。

発蕾期は平年並の7月上旬頃であったが、収穫始めである切り花始期は、平年に比べ4日から5日遅れた。

##### (イ) 9月咲き

挿し芽作業は4月下旬から5月上旬、苗の定植作業は概ね5月下旬、苗の摘心作業は定植後10日程度に行われた。

発蕾期は概ね平年並の8月中旬であったが、一部で8日の遅れがあった。

収穫時期である切り花時期は、地域や品種によるところはあるものの、平年に比べ10日遅れたところがあった。

#### イ 病害虫の発生状況

病害では、重要病害である白さび病の発生は平年並から少ない様子であった。

害虫では、アブラムシ類やタバコガ類が多発した。

#### ウ 高温による影響と要因

##### (ア) 高温による開花遅延

開花時期は、地域や品種により程度や発生有無に差があるものの、全体として8月咲き、9月咲き系統とも多くて10日以上遅延を生じた。とりわけ、8月の発蕾期前後に強い高温を受けた9月咲き系統において、遅延の程度が大きい傾向にあり、秋の彼岸時期を過ぎてから開花したものもあった。

電照栽培を導入していたほ場においても、6月から7月の電照消灯時期以後、花蕾の発達が進む時期に高温を受けたことで、狙いとする需要期に開花しなかった事例が見られた。

きくは発蕾期前後の高温が、以後の開花遅延に大きな影響を及ぼすことから、7月の高温が8月咲き系統、8月の高温が9月咲き系統、それぞれの開花遅延に影響したものと考えられた。

### (2)リンドウ（露地栽培）

#### ア 生育経過【作柄概況調査の結果より】

##### (ア) 早生系統

萌芽期は3月中旬から3月下旬であり、平年に比べ6日から12日早かった。

花芽分化時期の目安である上位側芽発生期は、5月中旬から6月上旬であり、平年より早い地域と遅い地域があった。早い地域では7日から11日早く、遅い地域では1日から5日遅かった。

収穫時期である採花期は、7月下旬から8月中旬にかけてとなり、概ね8月盆の需要期に出荷された。また、多くの地域で、平年に比べて採花期間が3日程度短い傾向であった。

##### (イ) 中晩生系統

萌芽時期は3月下旬であり、平年並から8日早かった。花芽分化時期の目安である上位側芽発生期は、6月中旬から7月中旬であり、平年より7日から10日早かった。

収穫時期である採花期は、8月下旬から9月下旬にかけてとなり、秋彼岸の需要期を過ぎながら出荷された。一部地域で、平年に比べて採花期間が2週間程度短い地点があったものの、多くの地域では平年に比べ1日前後の差であった。

#### イ 病害虫の発生状況

病害では、りんどうの主要病害が発生したものの、平年並に留まった。また、いくつかの地域では、8月中下旬頃に葉枯病が上位葉で突発した。

害虫では、アザミウマ類、タバコガ類、ヨトウムシ類、ハダニ類が全体的に多発した。とりわけ、ハダニ類は5月以降栽培期間を通して、タバコガ類とヨトウムシ類は8月下旬から多かった。

#### ウ 高温による影響

##### (ア) 高温による開花前進

早生系統の採花期間が短かったことから、7月から8月にかけての高温は早生系統の花芽発達促進に働いたものと考えられる。また、地域や品種によって開花前進が3日から10日見られたとの報告があった。

##### (イ) 高温障害（奇形花や花弁の着色不良）の発生

中晩生系統では、花蕾の生育停滞や花弁の着色不良多発が、平年よりかなり多く見られた様子であった。これは、8月の花芽発達時期に、非常に高い高温を受けたことによるものと考えられる。

### (3) トルコギキョウ

#### ア 高温・少雨による影響と要因

##### (ア) 高温による開花前進

県内全域で、季咲き、抑制の両作型における開花時期の前進化が見られた。

季咲き作型は、開花時期が7日から10日前進し、8月盆需要期を大きく外して出荷された。さらに抑制作型は、開花時期が10日から14日前進し、9月の秋彼岸向けであったものが8月下旬から出荷開始、10月の婚礼向けのものが9月下旬から出荷開始になるなど、高温により大きな影響を受けた。

これに伴い、需要期を外して出荷されたものは、販売価格の低下も見受けられた。

トルコギキョウは、高温により花芽分化や花蕾形成を促進させるため、季咲きでは6月から7月の高温が、抑制では7月から8月の高温がそれぞれ影響を及ぼしたものと考えられる。気温そのものが高かったことから、既存の対策技術である遮光などを実施しても、影響は不可避であった。

##### (イ) 短茎開花の多発による品質低下

早期に花芽分化することにより引き起こされる短茎開花が多く発生した。また、腋芽の発生が少なかった地域では切り花のボリューム不足も見られた。

トルコギキョウは、高温により花芽分化が促進され着花節位が低くなることから、これらの多発につながっており、また栄養成長が不十分な状態で花芽分化を迎えたことから、側枝の発生も進まず着蕾数や花弁数の減少がみられ、ボリューム不足が多発したものと考えられる。

#### (4) 宿根カスミソウ

ア 高温・少雨による影響と要因

##### (ア) 高温による開花前進と短茎開花

生産地域全体において、新植と2番花の作型ともに開花時期の前進化と短茎開花の発生が顕著に見られた。とりわけ秋の出荷時期は2～3週間前進し、出荷規格は60cmから7cm程度のものが主となり、80cm以上である長い規格品の割合が低くなった。

一方、10月以降の晩秋も比較的高温や多日照となり、収穫されずに花茎を残してしまう切り残しが少なく、総じて出荷量は多くなる傾向であった。

宿根カスミソウは、長日条件下では、栽培環境が高温になるほど節数が減少し草丈や上位規格率も減少することから、定植後の生育期間を通しての高温が影響したものと考えられる。